

たり、ヒシホといふ義は不詳、楊氏漢語抄辨色立成には、高麗醬をミンといひ、漢人の書にも、雞林にしては、醬を蜜祖といひ、我國にしても醬を彌沙ミサといふとするしたれば、ミンといふもの、醬なりし事は、疑ふべくもなし、醬またヒシホといふ事の如きも、ミンといひしに異なる詞也とも聞えず、ヒといひ、ミといふは轉語也、シホといふは、即ソといふ語を開き呼びし也、たとへば芭蕉紫苑などいふもの、如き、漢音をもては、バセウ、シランなどいふを、我國之語には、バセヲ、シヲニといふが如くに、其初は高麗醬の如きも、彼國の方言にてはミンといふを、我國之語にはヒシホといひしを、後に又唐醬の製に倣ひ、造れるもの、出來しに及びて、高麗醬を呼ぶ事は、彼國の方言のまゝに、ミンといひ、我國にて造れる物をば、ヒシホといふ事になりしかば、令の如きも、ミンといひ、ヒシホといふ事を分つべきために、未醬の字を用ひて、讀でミンとなし、醬の字讀でヒシホとはなされたる也、これよりして後ミンといひ、ヒシホといふ事異なる詞の如くになりてければ、順の博識なるも猶其疑を致しける也、今の如きも、俗には醬を呼びて甘味、醬とも云ひ、又味、増といふ言をもて加へ呼ぶ醬の製も少からぬ也、

〔大上臈御名之事〕女房ことば

一みそむし。

〔貞丈雜記六飲食〕一味噌を女の詞にむしと云由、上臈名之記にみへたり、みとむ五音通ずる也、ムミモ、サシスセソ、然る間みそをむしと、詞をいひかへたる也、五音通ずる故なり、

〔慶長見聞集八〕村岡茂兵衛あるじまうけの事

見しは今、江戸通町或人のもとに、思ふどち六人さしあつまり、世上の事身の上までも、心に殘さず語る處に、略中およそみそと云事を、香といふ子細有、源氏にはく、香づくしにひくらしといふ香の名有、又公卿殿上人はみそをひくらしとのたまふ也、雜人中人のことばにみそを虫と云、是はひくらしといふ名をもて、香といひ虫といふ也、